

自らすすんで学び ともに築き

豊かに生きる 岩倉の子

めざす岩倉の子像
なりたい自分になるために

価値創造 自立 社会的包摂
Innovation Independence Inclusion



京都市立岩倉北小学校のグランドデザイン

1 「学校教育目標」のめざすもの

本校の学校教育目標の構成は、めざす岩倉の子像『なりたい自分になるために「好きなことをする」「人のためにする」「すすんでする』の実現という目的をもった学びをすすめるために、

- ①「価値創造・自立・社会的包摂」をキーワードとして、
- ②児童一人一人の成長（キャリア形成）を促し、
- ③学校の強みを生かした「学びのデザイン」づくり

「わからないから考える 失敗するからおもしろい 困ったときほど顔をあげ 話し合うから楽しいんだ」をすすめるものとしています。

(1)「自らすすんで学び」

学校は児童と指導者がともに「学び合う」「高め合う」ところであり、一方通行の「教えるところ」・「教わる場所」ではありません。また、指導者が持っている「答え」に導く授業は、岩倉北小学校が目指す「学びのデザイン」ではありません。児童自らが問いを設定しその解決のために学ぶ「主体的・対話的で深い学びの実現」「能動的な学習者（アクティブラーナー）の育成」の実現をめざすものです。

今年度は特に、「主体的（自分の意思）」な学びから「能動的（他者への働きかけ）」な学びへ「新たな価値の創造（Innovation）」を目指します。

(2)「ともに築く」

自ら未来を切り拓く「**自立 (Independence)**」した人材を育てることが学校の大きな役割です。対話的・協働的な学びは、能動的な学習者を育てる根幹となります。「ともに築く」姿勢・考え方は、誰一人取り残さない質的な豊かさを伴った持続可能な社会づくりをすすめる基盤となると考えています。

(3)「豊かに生きる」

「豊かさ」とは何か、その答えは一人ずつが違い、また、同じであるところもあります。これらの違いを認め合い、同じでつながり合うことが一人一人のよさを生かしかう「**社会的包摂 (Inclusion)**」の考え方を育てます。どのように「生きるか」、一人一人の「生き方」につながる「問い」を探究することは、自分自身の学びや生き方を振り返り「これから」を考える岩倉北の学びのデザインの基本となるものです。

(4)「岩倉の子」

学校教育目標は、教職員だけの目標ではありません。どのような子供を育てようとするのかを教職員、児童、地域・保護者等、岩倉北小学校に関わる全ての人と共有し、めざしたくなるものでなければならないと考えています。学校教育目標のイメージの共有を「岩倉の子」の言葉に託しました。

2 めざす岩倉の子像

互いを認め合い生かし合い「豊かに生きる」ためには、自らの「生き方」を見つめる視点が必要です。「視点」とは、「見方・考え方」であり、「問いかけ」でもあります。どのように自身の「生き方」を見つめていくのかを、「なりたい自分」に近づいているかを測る「問いかけ (視点)」として、3つの言葉で示しました。



(1)「好きなことをする」

能動的な学びの姿を指すものであり、「自らすすんで学ぶ」につながるものです。自らすすんで学ぶためには、受動ではなく能動的になることが大切です。内発的動機に基づく能動的な活動の原動力を「好きなことをする」として示しました。誰しもが「好きなことをする」ことに、努力は惜しみません。

(2) 「人のためにする」

誰一人取り残さない質的な豊かさを伴った持続可能な社会を創る・豊かに生きるベースとなる考え方です。その基となるのは、自他の肯定と尊重とともに協働的な活動を大切にすることであり、「ともに築く」と歩調を同じくするものです。自分とともに、他者を理解し意識することが能動的な学習者の育成にもつながります。

(3) 「すすんでする」

岩倉北小学校の掲げるイノベーションとは、「新たなものを創造し、社会に新しい価値を生み出すこと」。社会と関わる第一歩は、自ら動き出すことです。そして他者と関わることです。「能動的」な学びの第一歩は自分から「すすんでする」ことです。

また、指導者として目に見える「動き出し」だけを評価するのではなく、考えようとすること、考え始めること、結果が伴わなかったこともすべてを「すすんでする」の評価として、児童を認める姿勢を大切にすることです。

3 岩倉北小学校の「学びのデザイン」

(1) これからの「学びのデザイン」

「アフターコロナ」「ウィズコロナ」の学びのデザインとは…、どれも「コロナ」が主役であって児童が主役ではない言葉です。しかしながら、新型コロナウイルス感染症の感染拡大を前後して、学校や授業の捉え方は大きく変わろうとしています。だからこそ、対面形式を第一としたこれまでの「学び方」に固執しない、また、ICT活用といったネットワークを用いた技術革新に追われない「学び方」をつくるのが大切であると思います。何かにとらわれたり、追われたりするのではなく、教育の本質的を問う「学び方」づくりが大切になるのです。その中心となるが岩倉北小学校の「学びのデザイン」であると考えています。

教育の本質を問う「学び方」づくりは、これまでの学校という枠組みを基盤に構成されるものではなく、学ぶ主体である児童を中心にしたものに編成していくことが必然となります。これは、「個別最適化」と表現されるものですが、あくまでも個別であって児童が孤立し、つながりを分断するものではありません。個別とは、一人一人の特性に応じることであって、一人一人が勝手気ままに振る舞うことではないからです。例えば、「タブレット」は、孤立を生み出すツールではなく、個に応じた学びを進めるツールであり、場所や時間の壁を越えて学び合いができるツールである」というような理解をベースとする「学び方」です。

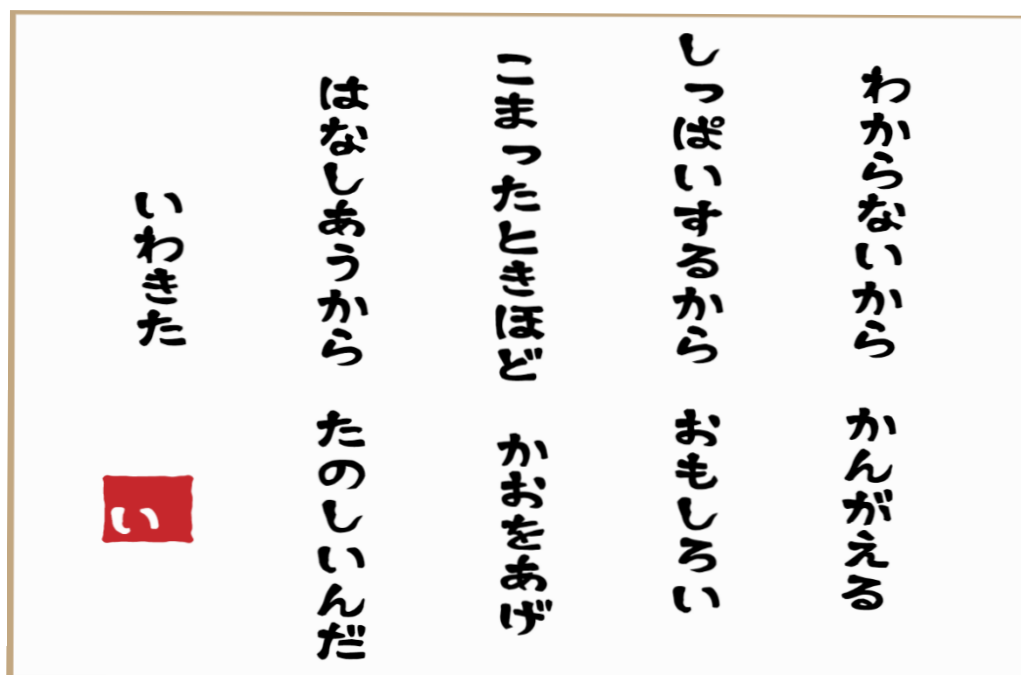
その前に、学校ですすめる教育活動そのものの「価値」や「基準」も見つめ直すことが必要となってきます。これまでの価値観をリセットすることです。「教室で全員が前を向いて指導者の指示に従い正答を求める授業」は、岩倉北小学校の求める「学び方」ではないというリセットです。

まず、「教室」という枠組みは学校の教室というハード面を固定するものではなく、「学び場」としての空間（ネットワーク空間も含む）であると考えます。「全員が前を向かなくてはならない」状況は、教材や指導者が前方に提示されている、授業の主導権

は指導者が保持しているという固定観念から生まれるものであり、一人一台のタブレットがあり、いつでもどこでも活用できる状況が当たり前になれば「前を見る」のではなく、教材や資料を見つめることが第一になります。また、児童の学びが主体の授業では、「指導者の指示」に従うことは授業の中心とはなりません。そして、指導者が準備した「正答」を求めることは、「問い」を求めるという児童主体の学びのスタート地点にすら立つことができません。

まさに、今年度本校の掲げるイノベーション「新たなものを創造し、社会に新しい価値を生み出すこと」が学びのデザインの重要なポイントとなるわけです。

では、本校のイメージする「学びのデザイン」とはどのようなものでしょう。



学びでは「わからない」は、マイナスではありません。わからないから考えるのです。この「わからない」をどのように設定するのか、そして、どのようにすれば「わからない」が「考えてみたい」に変容していくのか、これを考えることが「学びのデザイン」を探究する第一歩となります。

そして、「学び」の価値が、「失敗するからおもしろい」と捉えることで、失敗は失敗に終わらず「チャレンジ」であり、行動であり、探究であり、真理を求める本物の「学び」であると価値づけることができるのです。だからこそ、「困ったときほど顔をあげ」て意気揚々と学びに向かい、仲間とともに学ぶ場である学校の機能を最大限生かして「話し合うから楽しいんだ」につながるのです。

わからないからこそ、失敗するからこそ、困るからこそ、学びが深まるのであり、わからないことをマイナスと捉えて、失敗させない、困らせないための支援は教える側の保険でしかありません。

学びのスタートは「わからない」ことを「考えてみよう」とする「学ぶ場」を機能させることです。今年は、「わからない」からスタートする「学び」をつくっていきましょう。